第六章　光る源氏の物語　寂寥の日々

［第一段　諒闇明けの新年を迎える］

*年も変はりぬれば（新年を迎え帝が故院の服喪で謹慎する諒闇が明けて）、内裏わたりはなやかに（宮中は華やかになって）、*内宴、踏歌など（祝いの儀が開かれると）聞きたまふも（お聞きに為っても）、もののみあはれにて（中宮は気が晴れずに）、御行なひしめやかにしたまひつつ（仏前供養をひっそりと為さりながら）、後の世のことをのみ思すに（死後の安寧だけを願う内に）、頼もしく（上手く事が運ぶように思えて）、むつかしかりしこと（右大臣家の圧力に苦しんだ事や春宮が源氏との不義の子である秘密露見の恐れなどを）、離れて思ほさる（遠い昔の事に御思いに為りました）。　*注に＜源氏二十五歳、桐壷院の諒闇が明ける。＞とある。因みに、藤壷30歳、春宮7歳、今上帝28歳。　*注に＜内宴は正月下旬の宮廷における公宴。踏歌は、男踏歌が正月十四日の夜、女踏歌が正月十六日夜に、帝の御前を出発して院の御所、中宮御所、春宮御所の順に廻って、宮中に明け方帰ってくる。出家した藤壷には無関係。＞とある。

常の（日頃の）御念誦堂（おねんじゅだう、仏壇）をば（へのお参りというものは）、さるものにて（当然として）、ことに建てられたる（念仏供養の為に建てられた）御堂の（みだうの、御念誦堂が）、西の対の南にあたりて、すこし離れたるに渡らせたまひて、とりわきたる御行なひせさせたまふ（念入りに読経勤行なさいまされます）。

大将、参りたまへり（源氏が参賀に見えました）。改まるしるしもなく（新年らしい賑やかさは無く）、宮の内のどかに（宮邸は静かで）、人目まれにて（人少なで）、宮司どもの（みやづかさどもの、中宮付きの女官たちの中でも）親しきばかり（親しい者だけが）、うちうなだれて（地味な格好で庶務を勤めていましたが）、見なしにやあらむ（心なしか）、屈しいたげに思へり（気落ちしているように思えました）。

白馬（あをうま、ちょうど其の日は*白馬の節会で）ばかりぞ（是だけは縁起物なので出家した中宮の邸にも）、なほ牽き変へぬものにて（今年も変らず馬寮から白馬が庭に牽き入れられたので）、女房などの見ける（女房たちなどが見物していました）。　*「白馬の節会（あをうまのせちえ）」は＜宮中の年中行事の一。陰暦正月7日、左右馬寮（めりょう）から白馬を紫宸殿（ししんでん）の庭に引き出し、天覧ののち、群臣に宴を賜った。この日に青馬を見ると年中の邪気が除かれるという中国の故事による。もと青馬を用い、のちには白馬または葦毛の馬を用いたことから、文字は「白馬」と書くようになった。（大辞泉）＞とある。

所狭う（道を埋め尽くすほど大勢で）参り集ひたまひし上達部など（節会に同伺して来た高官たちが）、道を避きつつ（宮邸の玄関を避けながら）ひき過ぎて（通り過ぎて）、*向かひの大殿に集ひたまふを（向かいの右大臣邸に集まりなさるのも）、かかるべきことなれど（世の習いとはいえ）、あはれに思さるるに（中宮は寂しくお思いでしたが）、千人にも変へつべき御さまにて（一騎当千の御姿で）、深うたづね参りたまへるを見るに（礼儀正しく源氏が御

挨拶に見えたので)、あいなく涙ぐまる(中宮は思わず涙ぐみました)。　*注に＜二条大路を挟んで、南側に藤壷の三条宮邸、北側に右大臣邸が向かい合っているという設定。＞とある。

客人も(まらうとも、客人の源氏も)、いとものあはれなるけしきに(浮世離れの枯れた景色の宮邸を)、うち見まはしたまひて(見渡し為されて)、とみに(直ぐには)物ものたまはず(何も仰れません)。さま変はれる御住まひに、御簾の端、御几帳も青鈍(あをにび、青灰色)にて、隙々よりほの見えたる薄鈍(ひまひまよりほのみえたるうすにび、其の間から微かに見える女房たちが立ち居する喪服姿)、梔子(くちなし、黄土色)の袖口など、なかなかなまめかしう(なかなか優美で)、奥ゆかしう思ひやられたまふ(奥床しく感じられました)。

「解けわたる池の薄氷(解け出した池を覆う薄氷や)、岸の柳のけしきばかりは(岸の柳の芽吹きだけは)、時を忘れぬ(春の訪れを忘れない)」など、さまざま眺められたまひて(時の移ろいを感じながら庭を眺め為さって)、「*むべも心ある(さすがに心得た)」と(と古歌を)、忍びやかにうち誦じたまへる(静かに口ずさみなさる源氏は)、またなうなまめかし(またとなく優美でした)。　*注釈に＜『源氏釈』は「音に聞く松が浦島今日ぞ見る　むべも心ある　あまは住みけり」(後撰集雑一、一〇九三、素性法師)を指摘する。＞とある。引歌は「音に聞く(噂に聞いた絶景と名高い)松が浦島今日ぞ見る(松が浦島をやっと今日は目にする事が出来ましたが)むべも心ある(確かに是ほどの素晴らしさなら風情を解する)あまは住みけり(海人というよりは尼僧が住むのでしょうね)」という所のようだ。この引歌を下敷きに次の源氏の歌が詠まれているので私には之の注釈は必脚だが、当時の読者にとっては注釈無しの記述で通じる程に之の引歌は全くの常識だった、ということなのだろうか。ともあれ是は「あま」を「海人」と「尼」に掛けた洒落詞の歌なので、中宮が尼上になったことから源氏が引き合いに出した、という形で実は次の歌に「松が浦島」を詠み込む下敷きとして作者が用意した仕掛けなのだろう。というのは、「松が浦島」は名勝地の歌枕らしいが、地名としては金鉱の奥州平泉に近い宮城の松島付近のようで、いや仮に其れが何処であろうと其れに因んだ記述は此処の庭の描写には一切無いので、いくら景勝地でも「松が浦島」をいきなり此処の庭の風情の引き合いに出しての歌詠みは、余りに唐突だから。

「ながめかる海人のすみかと見るからに、まづしほたるる松が浦島」(和歌 10-30)

「静まり返る庭先が、むしろ清しい松が浦島」(意訳 10-30)

*注に＜源氏の贈歌。「ながめ」に「長布(海藻)」と「眺め(物思いに沈む)」、「あま」に「海人」と「尼」を掛ける。「潮垂る(しほたる、潮が滴る～涙に袖が濡れる)」は「海人」の縁語。「松が浦島」は名勝地の歌枕。＞とある。歌意は「物思いに沈みがちな尼上の御住まいに相応しく、配した松さえ遠慮がちに折れ垂れた枝振りの見事な庭です」という思い遣りの挨拶だろうが、其れを「海藻採りの海人の住処らしく、見るからに粗末な波に洗われる待ち人も来ない離れ屋ですね」という冗句めいた言い方で親しく戯れながら、景勝地に掛けた海連想の言葉遊びで心憎く包んだ歌、という事だろうか。どうも出来過ぎていて、やはり之の歌ありきの話し運びを感じる。

と聞こえたまへば(と廂上がりで源氏が申し上げなさると)、奥深うもあらず(以前のように奥まらず)、みな仏に譲りきこえたまへる御座所なれば(母屋を仏間にして廂寄りに尼君が御座所にしていらしたので)、すこしけ近き心地して(少し身近な感じで)、

「ありし世のなごりだになき浦島に、立ち寄る波のめづらしきかな」（和歌 10-31）

「煙の果ての浦島に、客人迎える珍しさ」（意訳 10-31）

*注に＜中宮尼上の返歌。「浦島」を受けて返す。「余波（なごり）」と「波」は縁語。浦島伝説を踏まえる。＞とある。贈歌と同じ海連想の言葉遊びを受けながら、「昔の面影も無い寂れた邸に、珍しく御客様をお迎えする事が出来ました」と来訪御礼の挨拶をした、ということらしい。

とのたまふも（と尼上が返歌を女房に取り次がせる気配が）、ほの聞こゆれば（少し聞こえたので）、忍ぶれど（堪えようとしたが思わず源氏は）、涙ほろほろとこぼれたまひぬ。世を思ひ澄ましたる（世を達観したように）尼君たちの見るらむも（尼になった女房たちに泣き顔を見られるのも）、はしたなければ、言少なにて出でたまひぬ（源氏はそそくさと挨拶だけして御帰りになられました）。

「さも（何と）、たぐひなく（例を見ないほど）ねびまさりたまふかな（御立派に御成りなのでしょう）」

「心もとなきところなく世に栄え（何不足無く世の上に立ち）、時にあひたまひし時は（時向いて御出での時は）、*さる一つものにて（そうした恵まれた人の例に違わず）、何につけてか世を思し（何を見て世の中をお考えになり）*知らむと（治世なさるのだろうか、いや出来ないだろうと）、推し量られたまひしを（案じられたものですが）」　*注に＜「さる」は恵まれた人をさす。そうした人に共通のことでの意。＞とある。　*「知る」は＜分かる、理解する＞の他に＜治世する＞の意がある、と古語辞典にある。なお、「何（につけて）か」は反語表現。

「今はいといたう思ししづめて（今はもう随分思慮深く落ち着いていらして）、はかなきことにつけても（他愛ない事でも）、ものあはれなるけしけさへ添はせたまへるは（深い思い遣りさえ漂わせていらっしゃるのは）、*あいなう心苦しうもあるかな（ちょっと大人しすぎるみたいよね）」　*「あいなし」は、期待値に合致しない、ので＜つまらない、興ざめだ＞となるらしい。「こころぐるし」は、対象の不利な態勢や萎縮恐縮した態度、を＜可哀相＞とか＜申し訳ない＞などと気詰まりに思う気持ち。理屈だと＜不似合いなほどの萎縮振り＞みたいな事かと思うが、今だとそういう時は＜ちょっと大人しすぎる＞くらいかと。

など、老いしらへる人々（年老いた女房たちは）、うち泣きつつ（涙混じりに）、めできこゆ（源氏を御褒め申します）。宮も思し出づること多かり（中宮も思い出し為される事は沢山おありでした）。

［第二段　源氏一派の人々の不遇］

司召（つかさめし、正月中旬に御所で発表される右大臣差配の地方官の任官辞令）のころ（に於いて）、この宮の人は（中宮に仕えてきた役人は）、賜はるべき官も得ず（任ぜられるべき官職も得ず）、おほかたの道理にても（決まり事通りの）、宮の御賜はりにても（中宮への給付についても）、かならずあるべき加階などをだにせずなどして（定期加増すら見送られて）、嘆くたぐひ（嘆く者たちが）いと多かり（とても沢山居ました）。

かくても、いつしかと（出家したとはいえ、このように直ちに）御位（みくらゐ、后の地位）を去り（を廃され）、御封（みぶ、給付金）などの停まるべきにもあらぬを、ことつけて（強いて出家を理由にして）変はること多かり（変わる事が多かったのです）。皆かねて思し捨ててし世なれど（中宮自身はそうした事は全て振り切った俗世の事柄でしたが）、宮人どもも（自分に関った女官たちなどが）、よりどころなげに悲しと思へるけしきどもにつけてぞ（不遇を心細く思っている様子には）、御心動く折々あれど（同情もなさる事もありましたものの）、「わが身をなきになしても（自分を犠牲にしてでも）、春宮の御代をたひらかにおはしまさば（春宮が恙無く即位されるのであれば、何より）」とのみ思しつつ（とだけ考えて）、御行なひたゆみなくつとめさせたまふ（日々の念仏行を怠る事無くお勤めになりました）。

人知れず危ふくゆゆしう思ひきこえさせたまふことしあれば（春宮が源氏との子である事は極秘で常に立場を危うくしかねない皇太子に在るまじく思い申される事だったので）、「我にその罪を軽めて（我が身の不幸を以って其の罪を減じて）、宥し給へ（ゆるしたまへ、寛大な御処置を願い奉る）と、仏を念じきこえたまふに（念仏を御唱えになって）、よろづを慰めたまふ（御無事をお祈りなさいます）。

大将も、しか見たてまつりたまひて（春宮の立場については中宮と同じに思い申し為されて）、ことわりに思す（中宮が右大臣家の横暴に目をつぶって念仏勤行なさるのを良く理解されていました）。この殿の人どもも（とはいえ源氏に仕える役人たちも）、また同じきさまに、からきことのみあれば（冷遇されていたので）、世の中はしたなく思されて（右大臣の差配をあさましく御思いに為って）、籠もりおはす（二条院に引籠もって居らっしゃいます）。

左の大臣も、公（おほやけ）私（わたくし）ひき変へたる世のありさまに（すっかり変ってしまった世の有様に）、もの憂く思して（厭気が差して）、致仕の表（ちじのへう、退職願＝辞表を）たてまつりたまふを（お伺い奉りましたが）、帝は（帝は左大臣を）、故院のやむごとなく重き御後見と思して（故院が最も信頼為された腹心であり）、長き世のかためと聞こえ置きたまひし御遺言を思し召すに（自分の治世にとっても重鎮に遇する様にとの御遺言を御思い為されると）、捨てがたきものに思ひきこえたまへるに（辞職を許しがたくお思いに為られたようで）、かひなきことと、たびたび用ゐさせたまはねど（再考せよと何度も留意なさいましたが）、せめて返さひ申したまひて（ついに左大臣は辞表を願い出たまま）、籠もりゐたまひぬ（出仕なさいませんでした）。

今は、いとど（今は偏に）一族（ひとぞう、関白大臣一族）のみ（だけが）、返す返す栄えたまふこと、限りなし（ますます権勢を振るうばかりでした）。世の重しとものしたまへる大臣の（政治の運営に良識があると評判だった左大臣が）、かく世を逃がれたまへば（こうして公職を去れば）、朝廷も心細う思され（帝も治世に不安を御覚えになり）、世の人も、心ある限りは嘆きけり（多くの人も見識のある者は嘆いていました）。

御子どもは（左大臣家の子息たちは）、いづれともなく人がらめやすく（いずれの方も人柄が良く）世に用ゐられて（要職に就かれて）、心地よげにものしたまひしを（順当に出世なさって居らしたが）、こよなう静まりて（今やすっかり勢いが衰えて）、三位中将なども（出世

頭の三位中将なども)、世を思ひ沈めるさま(前途を悲観している様子が)、こよなし(在り在りでした)。かの四の君をも(正妻である右大臣家の四の君の所には)、なほ(今でも)、かれがれにうち通ひつつ(途切れがちに通うという)、めざましうもてなされたれば(不遜な態度だったので)、心解けたる御婿のうちにも入れたまはず(右大臣家に手懐けられた他の婿たちとは仲間外れにされていらっしゃいました)。思ひ知れとにや(身の程を知れとばかりに)、このたびの司召にも漏れぬれど(右大臣は三位中将を春の昇進から外しなさいましたが)、いとしも思ひ入れず(中将は気にも為さいません)。

大将殿(帝の弟君である参議大将の源氏殿でさえ)、かう静かにておはするに(ここまで冷遇されていらするのを)、世ははかなきものと見えぬるを(権勢の移行と考えていたので)、ましてことわり、と思しなして(自分の不遇など当然と思う事にして)、常に参り通ひたまひつつ(毎日のように二条院へ出向いては)、学問をも遊びをも(詩作から演奏まで)もろともにしたまふ(一緒に楽しんでいらっしゃいました)。

いにしへも(昔の若い時分も)、もの狂ほしきまで、挑みきこえたまひしを(ばかばかしいほど競り合っていた事を)思し出でて(思い出しなさって)、かたみに今もはかなきことにつけつつ(互いに今でも些細な事まで)、さすがに挑みたまへり(以前と同じ様に張り合っていました)。

*春秋の御読経をばさるものにて、臨時にも、さまざま尊き事どもをせさせたまひなどして(季節ごとの読経会の他にも臨時に盛大な法会を開かれたりして)、また、いたづらに暇ありげなる博士ども召し集めて(朝廷に重用されず暇そうにしている学者たちを呼び集めて)、文作り(ふみつくり、漢詩作文会や)、韻塞ぎ(ゐんふたぎ、隠し韻を当てる遊び)などやうのすさびわざどもをもしなど(などのような気紛れの催しで)、心をやりて(気晴らしをして)、宮仕へをも(出仕すら)をさをさしたまはず(真面にお勤めなさらず)、御心にまかせてうち遊びておはするを(気の向くままに遊んでいらっしゃるのを)、世の中には、わづらはしきことども(宮廷勢力の中には非難がましい事などを)やうやう言ひ出づる人びとあるべし(次第に言い出す人も在る事でしょう)。　*「春秋の御読経(はるあきのみどきゃう)」とは、注に＜季の御読経。大勢の僧侶を招いて『大般若経』を転読する行事。当時は宮中のみならず貴族の家でも催された。＞とある。

［第三段　韻塞ぎに無聊を送る］

夏の雨、のどかに降りて、つれづれなるころ(梅雨で籠もりがちな頃)、中将、*さるべき(韻塞ぎに使う心算で)集(しふ、詩文集)どもあまた(類を多く)持たせて参りたまへり(従者に持たせて二条院にやって来ました)。　*「さるべき(其の為の)」は上の文を受けているので、此処では＜韻塞ぎの為の＞ということになる。「韻塞ぎ(ゐんふたぎ)」は＜漢詩の中の韻字を隠しておいて、当てさせる文字遊び。平安時代に流行。(大辞泉)＞とある。博識や見識を競った、のだろうか。

殿にも(源氏の方も)、文殿(ふどの、書庫を)開けさせたまひて(調べさせて)、まだ開かぬ(今まで用いずに居た)御厨子(みづし、書棚)どもの(類から)、めづらしき古集の(広く知

られては居ない古詩集の)ゆゑなからぬ(由緒だけは説得力のあるものを)、すこし選り出でさせたまひて(いくつか選び出させて)、その道の人びと(漢文の専門家を)、わざとはあらねど(あまり盛大な催しのようにはなさらないようにして)あまた召したり(数多く呼び出していらっしゃいました)。

殿上人も(貴族の友人たちや)大学のも(大学寮の秀才たちも)、いと多う集ひて(とても多く集まって)、左右に(大将方と中将方に)こまどりに(一人づつ)方分かせたまへり(組み入れて分けなさいました)。賭物(かけもの、賞品)どもなど(類なども)、いと二なくて(またとなく豪勢にして)、挑みあへり(競い合いました)。

塞ぎもて行くままに(試合が進むと)、難き韻の文字どもいと多くて(難しい伏字がかなり多くて)、おぼえある博士どもなどの惑ふところどころを(学識の高い教授たちでも分からない箇所を)、時々うちのたまふさま(適宜指摘なさる源氏の様子は)、いとこよなき御才のほどなり(全く以っての秀才振りでした)。

「いかで(どうして)、かうしも(これ程に)たらひたまひけむ(御出来に為るのだろう)」
「なほさるべきにて(やはり前世の善行によって)、よろづのこと、人にすぐれたまへるなりけり(何事も人より優れて御出でなのでしょう)」
と、めできこゆ(学者たちも源氏を褒めていました)。つひに、*右負けにけり(そして試合は遂に右方の負けと成りました)。　*注に「右」は＜三位中将方をいう。＞とある。左大臣家の婿だった大将と右大臣家の婿たる中将、という言葉遊びだろうか。大将が上位だから「左」なのか、説明は無い。

二日ばかりありて(其の二日後に)、中将*負けわざしたまへり(中将が負けた記しの接待をしなさいました)。ことことしうはあらで(派手な宴席では無く)、なまめきたる(上品で気の利いた)桧破籠(ひわりご、お弁当や菓子折り)ども(類や)、賭物(かけもの、勝者への土産品)などさまざまにて(など取り揃え)、今日も例の人びと、多く召して(今日も学識者を多く招いて)、文など作らせたまふ(漢詩など作り合いなさいます)。　*「負け態」は≪勝負事で、負けたほうが勝ったほうに賭け物を出したり、供応したりすること。(大辞泉)≫とある。遊びの勝負だから罪滅ぼしも遊びで、そういう名目での宴席を設けた、という所だろう。で、奢るからには中将が自邸に源氏らを招いた、のだとして中将邸の記述は初めてかと思っていたが、兵部卿宮の登場が後述された事で舞台が二条院のようにも思えて、良く分からなくなった。

階(はし、寝殿の正面階段)のもとの(の脇の)薔薇(さうび、バラが)、けしきばかり咲きて(咲き掛けた初夏の庭は)、春秋の花盛りよりも(如何にもの春や秋の花盛りよりも)しめやかにをかしきほどなるに(しっとりとして情緒があったので)、うちとけ遊びたまふ(内輪で親しく管絃の演奏を楽しみなさいます)。

中将の御子の、今年初めて殿上する、八つ、九つばかりにて、声いとおもしろく、笙の笛(しゃうのふえ)吹きなどするを、うつくしびもてあそびたまふ(源氏は気に入ってお褒めに成ります)。四の君腹の二郎なりけり(その子は四の君が産んだ次男でした)。世の人の思へる寄せ重くて(多方面から期待を寄せられていて)、おぼえことにかしづけり(大切に育て

られていました)。心ばへもかどかどしう(気が利いて)、容貌もをかしくて(顔も美しく)、御遊びのすこし乱れゆくほどに(曲が和音階に変ってから)、「*高砂(たかさご、宴席の祝い歌として定番の催馬楽)」を出だして謡ふ(いだしてうたふ、声を張り上げて歌う姿が)、いとうつくし(とても可愛らしいのでした)。大将の君(源氏は褒美に)、御衣(おんぞ、着ていた上着を)脱ぎてかづけたまふ(脱いで二郎君にお与えになりました)。　*「高砂」は注釈に＜催馬楽、律。「高砂の(たかさごの)　さ　いささごの(小砂子の、細かい砂が地道に積もった)　高砂の(防波堤の土手の)　尾上に立てる(をのへにたてる、尾根縄手に咲いている)　白玉玉椿(しらたまたまつばき、白い花の見事な椿や)　玉柳(たまやなぎ、美しい柳のような男振りを見ると)　それもがと(其れが欲しいと)さむ(望んで)　汝(まし)もがと　汝もがと(誰もが)　練緒(ねりを、練り糸)染緒の(さみをの、染め糸で織った女物の服の)　御衣架にせむ(みそかけにせむ、衣裳掛けのように頼りにしようとする)　玉柳　何しかもさ　何しかも(どうしてだろうか)　心もまたいけむ(気ばかり逸る)　百合花の(ゆりばなの、我が家の娘で)さ　百合花の　今朝咲いたる(今朝初潮を迎えたばかりの)　初花に(はつはなに、処女に)　逢はましものを(添い遂げさせたい)　さ　百合花の」。呂の音階が中国伝来の正階なのに対して、律の音階は日本的なくだけた音階。＞とある。引注の丸括弧内の言い換えは、全く自己流に古語辞典で単語を拾いながら付けたものだが、今日でも謡曲の「高砂」が結婚式の披露宴で謡われる定番の祝い歌である事にも符合する歌意、かと思う。尤も「この浦、船に帆を上げて」と落語にも取り上げられる謡曲「高砂」は、本物語が書かれてから相当に後世となる世阿弥(ぜあみ、室町時代初期の猿楽師)による能曲との事だが、「高砂」という言葉に＜脆いようでも長年同じ形を保持する＞ことと＜小さな事を長年積み上げて大きな仕事をする＞ことの複意は古くから認められていた、ようだ。実は、こんな面倒なノートは省略したかったが、この後の話の記述がこの催馬楽に基くようなので、その理解の為にも少し無理して自分なりに呑み込んでみた。

例よりは(いつもよりは)、うち乱れたまへる(すっかり寛ぎなさった)御顔の匂ひ(源氏の御顔の色艶は)、似るものなく見ゆ(とても浮かれて御出ででした)。薄物の直衣(なほし、普段着は)、単衣を着たまへるに、透きたまへる肌つき(透けて見える肌合いが)、ましていみじう見ゆるを(ますます優雅でしたので)、年老いたる博士どもなど、遠く見たてまつりて、涙落としつつゐたり(生き仏かと有難がっていました)。「*逢はましものを、小百合ばの」と謡ふ(と二郎君の催馬楽が)とぢめに(終わり掛ける時に)、中将、御土器(おんかはらけ、源氏に杯を)参りたまふ(お勧めになって、こう贈歌なさりました)。　*注に＜「高砂」の末句。歌詞は「さ百合花の」であるが、実際歌う時は「さゆりばの」となったかという(『湖月抄』師説)。＞とある。子供が謡う「逢はましものを」は＜似合うと良いな＞くらいの感じに聞こえたかもしれない。

「それもがと今朝開けたる初花に、劣らぬ君が匂ひをぞ見る」(和歌 10-32)

「思い通りに今朝咲くバラに、良く御似合いの貴方様です」(意訳 10-32)

ほほ笑みて(源氏は照れながら)、取りたまふ(杯を御受けに為ります)。

「時ならで今朝咲く花は夏の雨に、しをれにけらし匂ふほどなく　(和歌 10-33)

「季節外れに今朝咲く花は、笑う間も無く雨に萎れる　(意訳 10-33)

衰へにたるものを(すっかり衰えましたから)」と、うちさうどきて(態とふざけて)、らうがはしく聞こし召しなすを(酔った振りをする源氏を)、咎め出でつつ(中将はたしなめて)、しひきこえたまふ(無理強いして酒を勧めなさいます)。

多かめりし(この宴席で多く作られたであろう)言どもも(ことどもも、歌の数々も)、かうやうなる折のまほならぬこと(このような酒の上での戯れでは)、数々に書きつくる(一つ一つ取り上げるのも)、心地なきわざとか(見識の無い仕業なのだとか)、*貫之が諌め(歌論に長けた紀貫之が諌めているので)、たふるる方にて(其の論に傾斜して従がう事にして)、むつかしければ(気が乗らないので)、とどめつ(掲載を止めておきます)。皆(実際に皆は)、この御ことをほめたる筋にのみ(源氏を褒める内容ばかりの)、大和のも唐のも作り続けたり(和歌や漢詩を作り続けたのでした)。　*古今和歌集の編者の一人である紀貫之は其の序文で歌論を展開していて、それが和歌の歌論の始まりとも言われているらしい。「古今和歌集」は＜最初の勅撰和歌集。八代集の第一。20巻。延喜5年（905）の醍醐天皇の命により、紀貫之(きのつらゆき)・紀友則(きのとものり)・凡河内躬恒(おおしこうちのみつね)・壬生忠岑(みぶのただみね)が撰し、同13年ころ成立。六歌仙・撰者らの歌約1100首を収め、仮名序・真名序が添えられている。歌風は、雄健でおおらかな万葉集に比べ、優美・繊細で理知的。古今集。(大辞泉)＞とある。

わが御心地にも(源氏自身も)、いたう思しおごりて(すっかり其の気に成って思い上がりなさって)、「*文王の子、武王の弟(私は文才の王子で武芸の王弟)」と、うち誦じたまへる(興に乗って史記の一節を)御名のりさへぞ(名乗りなさるほどで)、げに、めでたき(実に愉快でした。ただし、その史記の一節の続きは成王の叔父というものでしたが、)。「成王の何(実権の王の何者)」とか(だと)、のたまはむとすらむ(源氏は仰ろうというのでしょうか)。*そればかりや(いや、そればかりは春宮の実父だけに)、また心もとなからむ(さすがに何とも言い出せない所だったのでしょう)。　*この一節は出典参照に『史記』の魯周公世家の伝として「周公戒伯禽曰　我文王之子　武王之弟　成王之叔父」とある。　*「そればかり」については、注に＜語り手の挿入文。「成王」を春宮に比すとすれば、原文では「成王の叔父」とあるのだが、源氏の実子であるから、そうとは言えない。『集成』は「それだけは自身がおありでないでしょう」の意に解し、「実は、源氏の子であるから、「成王の叔父」とは言えまいという皮肉」と注す。『完訳』は「不義の子東宮のことは、やはり気がかりだろう」と注す。＞とある。

*兵部卿宮も常に渡りたまひつつ、御遊びなども、をかしうおはする宮なれば、今めかしき御あはひどもなり(兵部卿宮も常日頃お見えになっては、器楽演奏などを上手に為さる宮でしたので、華やいだ御仲間内でした)。　*この兵部卿宮が誰かについては＜肖柏本と書陵部本は「帥の宮」とある。『完訳』は「通説では紫の上の父。源氏と親交する趣味人という点で、後の螢兵部卿宮（花宴巻では帥宮）とする説のほうが妥当」と注す。＞と注釈にある。事ほど然様に人物の特定が出来ないほど唐突で、何かの都合で数段割愛したか、辻褄合わせで付け足したか、のような記述に感じる。こうした語り口は之の物語では随所に在るが、其の度に作者とは別人の意図が疑わしいが、永遠の謎だろうか。